

桜蔭俳話会 四月例会（第二九四回） 秀句鑑賞

開催日 平成二三年四月二四日
会場 桜蔭会館会議室

警官の昼の交代花の門 秀一

一読したとき、この「門」として、桜田門にある警視庁の正門、皇居内苑への通用門が目の前に直ぐに浮かんだ。この警視庁や皇宮警察の立ち番の警官の交代時間がどのようになっているか知らないが、作者から「昼の交代」と断定されることによって、詳細な時間の詮索はもはや無用となる。飛花落花のまなかにある門の張り番の交代は、燦燦と日の注ぐ昼時とするのが最も相応しい。

厳めしい制服に身を包み、緊張して警備の任に当たっている警官諸士も、ようやく交代時期を迎え、張り詰めた気持ちを解いて、心から花を楽しめるのである。

警官を「剛」とすれば、花の「柔」との配合が巧みである。

春風のまぶたを軽く通りすぐ 眞三

必ずしも夏のざらざらした日差しの下でなくとも、目蓋を閉じて顔を春の日に向けたとき、目の裏に春の温かさを感じる。このように、日光からもたらされる熱による身体の特定位の温度を媒介としてそのときの季節を表現することは、普通のことと言える。しかし、作者は常套的な日光によってではなく、目蓋に触れて行く風の流れを媒介として季節を感じ取り春だと言っている。評者には、このような春の感じ方は新鮮である。

あまり材料をこね回したり、幾つもの材料を未消化のまま持ち込んだりしないで、目蓋とそれに触れる風に絞って簡潔に仕上げたのであり、作者のナイーブな感覚には脱帽するほかはない。

泥つきしランドセル抱く春悲し ヤエ子

互選で賛同者の多かった句である。間近に迫った入学のために用意されたランドセル、あるいは在校生が慣れ親しんでいたランドセルが、泥にまみれて発見された場面に遭遇したとき、目頭が熱くなることを禁じえない。俳句では悲しいとか楽しいとか自己の感情を直截に述べることは良くないものとされているが、掲句の場合には「春悲し」の下五は素直に受け取れる。

ただし、被災地で泥まみれのランドセルを作者が実際に抱いたのであれば、あるいはそのような場面を実見したのであれば何も言うことはないが、もしそうでなければ、いわゆる画像俳句として弱いものとなる。新聞紙面の画像やテレビ画面の映像から受けた自己の感慨を一句にまとめることを頭から否定するものではないが、俳句は、一般論として、自己が直接見聞ないし体験した事象（第一次情報）に基づいて詠まれたとき、読み手により深い共感が起きるものである。

添削が許されるとすれば、次のようにしたい。

春悲し泥にまみれしランドセル

「抱く」という動詞を入れなくても、そのようなランドセルの存在そのものから「悲し」という感慨が誘起されるのではないか。また、津波の濁流に揉まれて「泥だらけ」になっているのであろうから、「泥つく」では表現として弱いのではないか。また、動詞は出来るだけ少ないほうがよい。

春の大地揺るがして家族崩したり 溪水

自らに原因があって家族が壊れたのではない。仲の良い家族が突然に引き裂かれ、家族の生活の基盤もろともに崩されたのである。地震と津波は天災といって心の整理をするには、あまりに悲し過ぎるこ

とである。

家族が「建物の下敷きになった」、「津波に攫われた」という新聞テレビの映像や報道記事をそのまま生の言葉で性急に句に持ち込むのではなく、一度その事象を心の底に沈潜させ、自らの心に投影された心象イメージを「家族崩す」という作者自身の言葉として表現することによって、この句は抑制の効いた震災句として成功している。音数は多いが、それをあまり感じさせない。

被災地のさくらいつもの通り咲く 友子

「いつもの通り」とか「何事もなきやうに」とか「変はることなく」といった措辞は、震災後に開かれた句会では何度となく出会ったフレーズである。でも、「いつもの通り」などと真正面から言われてしまうと、「そうなんだよな」と頷くほかはない。強力な反対者が現れ得ない不思議な魔力を持った言葉である。

後で作者に伺えばご子息が医師として石巻の病院に勤務されていて、自身も被災者であるとのこと。作者も現地には何事もない春の時期に訪れ、ご一緒に桜を楽しまれたことがあるのであろう。とすれば、「いつもの通り」がより切実なものとして受けとめられる。

晩霜や丹沢山系くつきりと 貞勝

群馬県民であれば浅間山、茨城県民であれば筑波山というように日常の生活の合間にふと目にする山は決まっているようである。神奈川県民であれば、作者同様、丹沢山塊であろうか。

この句の良いところは、無駄な装飾の言葉を全てそぎ落としたところである。「くつきりと」と言い切ることによって、晩霜に見舞われた辺りの冷涼感を如実に感じ取ることができる。丹沢山系が活きた存在として眼前に展開され、すっきりとした句になっている。

アライグマ威嚇の双手春の土 幸

辞書によるとアライグマは、哺乳綱食肉目アライグマ科アライグマ属に分類される哺乳類とある。また、環境省指定特定外来生物及び日本生態学会指定日本の侵略的外来種ワースト 100 の指定種とあるから、日本の歳時記に掲載されている本来の「熊」には当たらないようである。

動物園の獣舎から土の運動場に出されたアライグマの生き生きした様子が、相撲の「もろ手」のようだと捉えることによって、アライグマの憎めない一面が活写されている。アライグマの折角の威嚇動作であるが、作者には功を奏さないのである。

文責 増田 守

【自句自解】

逝く春や思考停止の解けぬまま 守

三月一日午後二時四六分、未曾有の大地震が発生し、間もなく大津波が襲来し、被災地の惨状には言葉を失うばかりであった。これに加えて安全神話が脆くも崩れ、深刻な原発事故も発生した。

うろたえて嘆くばかりでは復旧も復興も前進しない、と頭では分かっている、未だ思考停止は解かれていない。児孫に健やかな国土・環境を残し、日本人として誇れるように、早く立ち上がらなければならないのであるが、この虚脱感は何ともしがたい。

【事務局より】

1. 五月例会(五月二二日)は桜蔭会館での持ち寄り句会ではなく、吟行句会を計画しております。

吟行目的地、集合場所及び時間などの詳細は、準備にお骨折り頂きました幹事の友子さん作成の案内書(同封のもの)をご覧ください。参加ご希望の方は、幹事に事前連絡して下さい。

2. 恒例の春季通信句会を開催します。句数は、春に属する季語を用いた3句です。出句締め切りは、年間日程表の記載の期限より若干遅らせて、5月10日と致します。奮ってご参加下さい。